遊女と尼法師

井川定慶

遊女の起源は定かでない。文獻に見えた最古は萬葉集であるけれども事實は上古の自由結婚時代まで上ぼせて宜からう。

名稱にも種々あつて娘子、遊行姫、遊女、遊君傀儡女偖ては現代の太夫藝娼妓夫々名の異るは時代の變遷につれその意味の內容をも變異してゐるし、日本古來の流俗を漢語に當て嵌めて却つて繁瑣な解釋を要することもなつた。又同時代において同多數で呼ばれてゐて、音樂を受持つのと婬を鬻ぐ者とに分れ、ウカレメ、アソビ偖ては彼女と傀儡師、浮浪と定往一一穿鑿考證することは茲には省いて、今は遊女も遊君等も一括して遊女の名で代表し、それらの發心と如何がはしい尼法師についてのべることにした。

西行法師の撰集抄には可なり此の邊の研究材料を求めえられるが、その治承二年長月ごろの紀行を讀んで見ると、かくも通りあはす多くの人の心を引き損ずることのあさましさよ。然し中には宿業を恐れて「露の命をつがんとて、謀事に侍れば心にもあらず。是に交り彼にともなへども、是に心を移

さず、彼に心をしめて、常に後の世の事を思はん人は、口に惡き言葉を吐き、手に惡き振舞侍れども、心うるはしく侍らん」とて外面如夜叉内面菩薩心の遊女も多く目出度く往生を遂げたものもあつたやうである。

偖て或る聖と打語つて其の遊里を過ぎんとする際に、むら時雨烈しく人の門に雨宿りし、暫時内を見入るに、あるじの尼も時雨の爲に雨洩りを塞がんと板一片をかつぎあちこちと奔走してゐた。

しつかふせや、をふきそわつらふ

と口すさめば此尼何と聞けん板をなげすてゝ、

月はもり雨はたまれとおもふには

と付けたので兩方連歌で意氣相應じ、「さも優に見過しがたかりしかば彼庵に一夜とまりて連歌など」曉まで明し暮したと記述してゐる。

こゝに注目すべきは江口の家並みする遊女家の主人が、尼であつたことである。かく發心して歌修行に歩く西行と氣が合ふたといふ、この尼女將は連歌に通じて眞の求道心があつた爲に、通り合せの旅僧を宿泊させたのであらうが、他の場合に尼姿の遊女や、女將があつて、道心の認むべき者のないのもあつたらしい。ずつと後世ではあるが伊勢路に居つた比丘尼といふ一種の遊女が居つたことは記錄に見えるが、或はこれら尼姿の遊女から來たものかとも察せられる或は他の別系統の浮浪乞食尼や

唱門師妻女からなつたのかは一考を要することである。

今の西行の連れの聖は此の一夜の宿に思を殘し胸をこがし、「立出る道すがらも、さも戀しき江口の尼かなとぞ申し待りし。」といふてゐるのを見ると、又僧侶が遊女屋で泊つて遊興して、別れを惜んだこともあつたらう。

又時には僧侶が遊女屋に立入つたことが緣となつて、歌の取り交はし往復する中に遊女の方では不知不識敎化をうけて遂に發心し、眞の求道の尼となつた者も少くなかつたに違ひない。

終夜なにとなき事とも語りし中に、遊女が述懷していふやうには、いとけなき頃よりかゝる遊女となり侍りて、年ころその振舞をし侍れども、いとほひなく覺へて侍り、云々と聞かされては、西行法師も墨染の袖をぬらしたが、程經て後來て見ればその女は江口の遊里には住まず所を變へて隱遁修行せしとぞ。

この物語りによつて、江口にをつた間は尼姿なりで遊女屋をなしてゐたが、泌々と身のつれなさを感じて眞の佛弟子尼の心となつてみればもはや遊女屋をするに忍ひずして眞の超脫離塵の尼僧生浪に入るべく轉居した女將達もあつたことを示してゐるのであらう。

けれども以上の西行と遊女の主じとの關係は唯だ歌連歌の上のみの投合であつたが、近江のかいづにゐた金といふ遊女は法師を夫に持つてゐた事が古今著聞集に見える。

尤も僧侶とて一概にいへないので、平安朝時代においては官寺に住む僧侶僧官を持つ貴族的官僧の他に、正式の得度をせずに野に隱れて修道するものや、或は鼻の下のくぐり建立に勸進聲閑し歩く者食を求める爲の方便として乞食沙門偖ては脫稅の爲の不得者、頭髮を抱ける毛坊主在俗法師聖り下司法師目出度やづくしの唱門師等、高德惡僧相變り天下の人民三分之二まで禿首となつたとは三善清行意見封事十二ヶ條に難詰つてゐることでも分るのであつて、家に妻子を蓄へ口に腥膻を啖み形は沙門に似ても心は屠兒の如く、其の尤も甚しきは聚つて群盜となつてゐたとまで言はれてゐる。遊女を妻にしたこと位は珍しくもなく、在俗僧は親鸞聖人の發案の如く傳へるのも餘りに昔が見えなさすぎるのである。キヨメ(掃除夫)穢多非人乞兒とらうそう(濫僧)とは塵袋といふ書には同一に伍してかいてあるし、後世お薦といへは乞食の別名だが、薦僧といふ語が殘てゐれば、隣つてゐたことを想像しえられるから、平安朝中期以後に濫らな僧があつてもそれは寺に住む一人前の僧には限らないで、在俗でもよいわけである。

偖て尼には貴女もなられたことは古今變りはないのである。播州竹岡の尼は中納言の配偶であつたが夫のつれなさに心すさめられて佛門に入り念佛行者となつた者だが、又、發心集には乞食尼が着る物さへ滿足になく秋空に裝を繼ふて震へる貧しい尼であるから淸水參詣人が憐んで單衣を與へば自らは着ずに直に寺院に奉加施入供養したといふが、その尼の手は細く白くその氣品のよく頭をすら〳〵

とかき流すことより推せば、都の貴女であつたに相違ないが、無常に感じ佛果を望んでの修業であるといふ樣な奇特な婦人とあつたことは同じく十訓鈔にものせてゐるのである。

又男に嫌われることをして男女の羈絆を切らうとて强ひて穢き風をなし、涙を流して生死を恐れ偏へに修養を怠らなかつた尼僧もあつたが、或時その尼が、人に約して五日の間戸を閉ぢたので、人々は隱し男が來るのかと怪しんでゐたところが五日目には立派に端座合掌高聲念佛をして大往生をとげたといふ。けれども當時の人々がこの賤形修道の尼にさへ男があるのではないかと疑つた一面には隨分如何はしい尼法師があり、古今著聞集に見ゆる一生不犯尼が可成りにあつたに基くのであらう。

寶物集にある神崎の遊女は海賊にあふた時に彌陀の誓願を賴み入つた爲に遂に紫雲たなびく往生をえたと極めて易行珠妙の念佛利益を語つてゐるのであるが、これは橫具三心者愚鈍念佛往生者の適例者と見る他に、ただ當時盛に行はれた念佛信仰は遊女までにほのかに響いてゐたものの今や遭難に際して生死の巖頭に立つて申した念佛で、常々敎化をうけてゐたのが思ひ出された念佛が、或は芝居にやる覺悟はよいかの時の稱名であつたのを僧侶の手になつた寶物集の事とて往生も紫雲靡けりと大袈裟にした物語りかは考へて見る必用があるにしても、兎も角も遊女にまで念佛信仰を行屆かしてゐたこと丈けは確である。

又前述の下司法師の類同で、食は人が爲に尼といふ形式をとつたものや、その反對に眞に佛道を修

行せんが爲に肉身を養ふ方便に乞食生活や日傭ひ渡世を選んだ心の殊勝な尼樣の居られたことは、往生傳の筑紫の老女のみには限らないのである。

發心集に四條の宮の半者が人を呪詛して乞食になつた話がのつてある。その下賤女は男に誑かされたのを恨んで、貴布禰社に祈願をかけて男は望み通りに湯殿で物の怪につかれて狂死をしたので悅に入つたが、自分も誓の通りに乞食に陷つたので、主人を去るや尼姿になつて口を糊し歩いたことになつてゐる。かくの如き恐ろしい心の持ち主の落ち着ち所にも尼法師といふ階級があてられてゐたのは寒心に堪えないのである。

女は五障三從七去の惡業人ぢやとは支那思想に濃く彩られた平安時代の人心を強く支配して、女は惡魔の如く考へられた。そして一切皆成佛を盾にとつて立つた台言兩宗の靈峰に女人を不入とする矛盾を平氣に行つてゐたが、佛の前には男も女も平等であらねばならぬ。況してや彌陀誓願の第三十五にはその女の缺は補はれてゐるのであつて、現實に行はれる女の罪惡は彌陀十劫の昔に償つて頂いてあるのである。何ぞ女を排除せんといふ婦人に對する新運動は彌陀信仰から活氣を與へた。

それかあらぬか朝朝鎌倉に幕府を開いて封建制度となり、武家家人の約が結ばれた時には、領地を有してゐて納稅大番兵役をする婦人は男子に劣らぬ立派な權利者であつて、婦人の覺醒と共に婦人の地位は上つたのである。これ啻だに上に政子尼將軍が表はれたことに基因するのではなく、男女平等

觀の實現化と見るべきである。

有名な書寫山の惟空上人が遊君長者を普賢の生身と拜むだ話しは、古事談、撰集鈔、宇治拾遺鈔に各のせてあつて或は神崎とし室とし、或は誦文をかへたり、或は、長者を第三者の地位で普賢白象を拜んだり又は相手にした遊君長者の遊宴亂舞を見ながら目をつむり誦すれば普賢となつたと、種々舒說はあるにしても、遊女屋の女將が普賢菩薩の生身だと夢のお告げを感得してこれを眞にうけて拜せん爲に來るといふ迄には婦人の地位の向上を認めた上でなければならないのである。

ところで上來のべた遊女も、下司尼法師も皆念佛往生となつてゐることは、男子の方での下司法師も揃つて念佛を稱へてゐたことと一對である。そして、遊女にしても僧から教化をうける前に自ら進んで僧の許に結緣しに來ることになつたのである。發心集に見ゆる室の泊り遊女が鄭曲を吟して上人に結緣せんと聖の乘船に近づき來たのや、勅修御傳の室の泊りの遊女や、經が島等の遊女舟が漕ぎつけ來りて聞法入信往生した等の話はこの消息を語るものである。

かくの如く彌陀念佛の信仰は上流階級の觀念門に對して、庶民間には口稱念佛として求道往生の爲となつたのもあるが稱へるだけの念佛者といふ風に分れてゐたのであつた。

この時平安末期において叡岳智慧第一の法然房の上人は諸教所讃多在彌陀の念佛といふよりか、靈感の信念を既往の智慧に鑑みて、智情共に滿悅の境界に到達しえられたその信仰そのまゝを哀はれ現

實に惱める同朋に傳へ共に彌陀大悲の溫かき憶に抱かれ人と決意されてその宣傳には、一身を拋つてせられるの金剛不壞の大信念であつた。この白熱的の心よりして上一天萬乘の戒師とも、下賤が伏屋漁人苫屋に至るまで教化せられることになつた、そのとく所は同じく彌陀念佛であつたが、天台教儀を蟬脫して善導流の口稱念佛を以つて人間性具の罪惡を自覺した上に稱へば往生疑なしと斷案を下されたのであつた。

念佛申せば肉食も婬欲もそのまゝで宜しとは、上人の在世に極力排斥された處であつて、止め止めんとすれども止められざるを如何せんと我身の程を自省して、佛になるものには罪惡はなすべきにあらずと一歩一歩修養の功を積まん、然れども止惡修善その物が佛になる道であるといふ聖道の教門でない限り、制止され難き罪惡こそは深く懺悔して念佛消罪以つて往生を期せんといふが上人の眞意であるまいか。上人御自身は他の聖りの如き濫行があつたことは一もない持戒堅固な方であつた、けれども、天台眞言の如き布教方法は下賤の者を洩すを憾みて、この缺を補ひ且は凡夫の罪惡を信仰の進むと共に減滅して行くべき彌陀信仰の鼓吹をせられたものである。

されば、一念歸命獲信者は正定聚の人なりとの自覺のもとに止惡せしめんと聞ける流派や、彌陀十劫誓願を聽くことの遲かつた眼が醒めて得た信念の上には止惡修善皆此れ念佛の行なりといふ流派、偖てはその何れにも偏せず、不撓不屈死まで進みやがて往生せんと始終心付けて邪路に陷らざらしめ

んとする現當二世の化益主義これこそ眞の法爾自然の念佛義よと傳へてもゐるのである。

法然上人在世において聞く人によつて流派分れ滅後變轉各々その境遇と列祖の祖述の仕方によつて今日の念佛各派の如く色彩を鮮明に分けたのであるが、これらを纏めた法然教團以外に、昔ながらの俗說念佛や、空也流鐘叩き六齊引聲念佛遊行念佛等は法然上人流の念佛義の横糸に入つてゐるにしてもその色彩の少い娯樂的趣味的念佛としてその形式を殘燭流に留めてゐるのもある。上述の他に東海道や關東に行はれてゐるチブタ流しは念佛者からであり、ナマダンゴは南無阿彌陀佛から轉じてゐるやうである。

かく、法然上人を中心にして各種の念佛義を一時纏めたものが、後には、再びそれを根本にしての技葉幹木と分れたものと、在來流のものとに並列する社會を現じて來たのである。

以上は文學博士喜田先生指導のもとにやりつゝある社會狀態研究の一端を囑のまゝにかいたに過ぎないのである。(大正、一一一一、二九)